

1. 序論

古い留袖の色がくすんだ黒・赤く焦げたような黒・冷たく感じる黒と様々であると感じ疑問が湧いた。なぜ異なるように見えるのか。なぜ現在は見る事が出来ない黒なのか。その疑問から重ね染めをする意味を歴史的考察と実験を通して調べた。また様々な色を使って重ね染めを行った黒をアンケート評価により、昔の染め方が良かったのか、さらに現在でも手間を惜しまなければより美しいものができるかを検証した。

2. 調査方法

サンプル布(絹 100%)を赤・青・黄・黒の染料を様々な順の浸染で重ね染めを行い、アンケートによる評価を行った。アンケート内容はただ黒く見えるかだけでなく、肌に合うか、美しい黒か、他の色との対比はどうかも含めた。また併せて古代から昭和までの黒染めの技術を文献から調べた。最後に実際の着物の染色を行った。

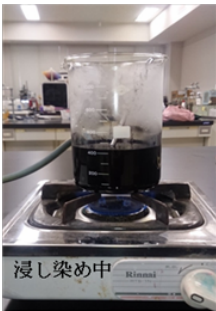


図 1 浸染の実施



図 2 肌との対比

3. 結果

基本的に重ね染めの回数が多いほど評価が高かった。右記のグラフで最も評価の高かったサンプル N とは 4 回染めたものであった。他にも高評価があったものは、4 回以上染めた布であった。しかし黒さでは 4 回染めだけだったが、美しい黒では 3 回染めも高い評価を得たものが少なかった。3 回染めたサンプル布の中で最も人気が高かったのは、昭和初期に高級品とされた染め方であった。最後に実際の着物を使って引染を行ってみたが、途中から染料が入らず、非常に重く色むらの激しい着物になってしまった。

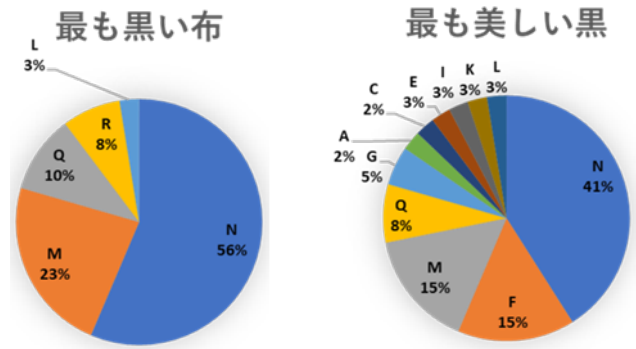


図 3 アンケートによる評価結果

4. 総括

結果として昔使われていた技法が現代でも十分通用するほど完成度が高いことが分かった。



図 4 制作した着物

これは歴史をみると化学染料が輸入されたとき今までの植物染料とうまく融合するように工夫され、試行錯誤の末考え出されたのであろう。

アンケートで最も評価の高かった 4 回染めは (M) 赤→黄→青→黒、3 回染めは (F) 赤→青→黒の順の重ね染めが高評価であった。しかし実際には引染でこの染め方は染料が載せられずに再現できなかった。浸染では 4 回染められるが、現在黒留袖・喪服を染める方法である引染では筆者の技術では 3 回が限度であった。3 回染めならば染められるが、3 回染めは染めむらになりやすく特に高度な技術を要する。さらに非常に重く、堅くなるため、軽く締めやすい着物が人気の現代とは馴染みが悪い。現在の黒染めの主流は黒色化学染料で 2 回染めるだけで他の色は使われないようである。化学染料は発色が良く経年劣化も少ないためと考えられる。また、最大の理由は現代の主流でない上にコストと手間のかかる黒染めには、より染めむらが生じる可能性の低い簡便な手法が選ばれているというのが著者の推論である。